

佛心



「行ってきます」

と

「行ってらっしゃい」

トロントに住んでいる私たちには待ち遠しい、夏の季節がやってきました。夏になれば公園や広場で仲間とスポーツをすることや、外で友人と集ってBBQをするなど冬にはできない楽しみが多くあります。しかし、未だにコロナウィルスの影響が様々なところで見受けられ、制限も多くあります。

トロント仏教会もその例外ではありません。バザーや餅つきなどのイベント事だけでなく、灌仏会や降誕会といった仏事に関わることも例年通りにはいきませんでした。その中でも日曜常例法座（サンデーサービス）の形式は、多くの御門徒さんが実感した寺院での変化だと思います。例えば、毎月第一日曜日の祥月法要では、約百人から百五十名の方がお寺まで足を運んでくださっていました。しかし、いまではその直接参拝もお断りしてZoom配信による仏事動行をおこなっております。

サンデーサービスだけでなく、葬儀や命日法要にいたっても同じです。葬儀会館では、人数制限が設けられ、友人や親戚を呼べず家族だけで勤めるようになっていきます。もちろん葬儀後

二〇二一年五月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会

の御斎も用意できません。その御斎の時間と違うのは、私にとって遺族とコーヒーを飲みながらゆっくり話し合える大切な時間でもありました。それも感染対策のため、その御斎の時間をなくすことも致し方ないことです。このように私も仏事を通して多くの変化を身に染みて感じてきました。

ただ、この様な状況下でも変えなかった習慣がひとつあります。それはお葬儀の打ち合わせです。

遺族の方がどんなに遠くに住んでいてもできるだけお寺へ出向くようにいたただいております。またどうしても来られない事情がある場合は、Zoomで顔を合わせて話すようにしています。なぜなら、故人の生年月日や往生日、喪主の連絡先を知るだけならメールのやり取りだけで済むはなしです。しかし、葬儀の打ち合わせを通して遺族と直接話すことで、故人の人物や性格、またその家族の思い出話を聞くことができるからです。

そこから感じ取れた印象を受けて法名を作成したり、その故人にあつた葬儀のありかたを考へたりします。そのためメールや電話のやり取りだけで葬儀の打ち合わせを済ませるのではなく、顔を合わせて直接話すことを大事にしています。そして遺族の話しになるべく耳を傾けたいため、私自身の話しはあまりしないように気をつけています。しかし、あるとき一人の御門徒さんから、「大内先生の家族との思い出はなんでしょうか？」と聞かれたことがありました。

恥ずかしいことながら、いままで自分自身に問いかけたことのなかった質問だったのでその場お答えすることが出来ませんでした。

その打ち合わせが終わった帰り道に改めて自問自答してみますと、私の両親は寺院で共働きだったため常に忙しく、ドイツニーランドやキャンプ、クリスマス、旅行といったイベント事はあまりなかったような気がします。そのため私の記憶の中で鮮明に覚えているのは、なにか特別なイベント事ではなく、小中学校へ行くときに必ず言われていた「行ってらっしゃい」という日常のできごとが思い出されました。

「行ってらっしゃい」と言われれば、誰もが「行ってきます」と返事をします。ただ昨晩に親子喧嘩をすると翌朝に「行ってらっしゃい」と言われても返答したくないものです。すると母親は私の腕を掴んで、「行ってきます」というまで離してくれませんでした。当時はなぜそこまで毎朝の挨拶にこだわることか分かりませんでした。しかし、先月ある勉強会で講師の方が挨拶についてお話をしてくださり、その意味が少し分かりました。

その勉強会の講師は山本成樹さんといって、日本の病院でチャプレンとして勤めている浄土真宗僧侶の方でした。彼の話しで「行ってらっしゃい」は、「行って（無事に帰って）らっしゃい」の略語。「行ってきます」は、「行って（無事に帰って）きます」の略語である教えてくれました。いままで何気ない挨拶としてしか使わなかった言葉に、こんなにも深い意味があるとは知りませんでした。

私の親がそのことを言葉の意味を知っていたかは、定かではありません。ですが、いまでもその普段の何気ない挨拶が思い出として残っているのは、なにか当時から伝わってくるものがあつたかのように思えます。

勉強会の中で山本さんは、勤めている病院での経験談を話してくれました。彼は浄土真宗の僧侶ですが、普段は患者さんに仏教の話しをしないそうです。なぜなら、病院で勤めている一人の僧侶としてもスタッフとしても、患者さんの話しを聞くことが一番大事だからです。

ただ、ある日、ガンを患っている高齢の女性から、仏教について話してほしいと言われ、先ほどの「いってらっしゃい」と「いってきます」の話しをしたそうです。

一通りの話をして、山本さんが病室を出ようとしたとき、その患者さんから「先生、いってらっしゃい」と言われたそうです。そのため、山本さんもその挨拶にこたえるようにして「いって（また会いに）きます。」と返答しました。すると患者さんは少し間をおいて「もしかしたら、私もいってきます。」と返したそうです。そこで山本さんは、この患者さんが何を伝えようとしていたのかを察して、病室を出るまえに一緒に念仏を称えたそうです。

そして一週間後、またその病院に訪れると、その患者さんの部屋のネームプレートは違う人の名前に変わっていました。山本さんは（やはりそうか・・・）と、寂しい気持ちとともにその部屋に向かって一人念仏を称えたそうです。すると、その患者さんが何を自分に伝えようとしたのか、あらためて気がつ

くことができたと勉強会の中で話してくれました。それは浄土真宗のみ教えです。

浄土真宗のみ教えでは、亡くなった人は、仏さまに成らせてもらうため阿弥陀如来の極楽浄土へ行き、そこで如来の智慧と慈悲をあずかって、仏さまとなり、またこの娑婆世界に、名号（南無阿弥陀仏）の念仏として帰ってくると聴かせていただきました。

この阿弥陀如来のおはたらきを他力といいますが、私たち念仏者は、自分の力（自力）ではなく、仏様のおはたらき（他力）を本願として依りどころとします。ではなぜ一度浄土へ往つたものが、またこの世に帰ってくるのか？それは他の人を教化するためです。

阿弥陀如来のおはたらきにであい、仏さまと成らせてもらったものは、自身が賜った利益（りやく）を他者にも分け与えずにはいられなくなります。分かりやすく言えば、他の人も阿弥陀仏のおはたらきに出遇うご縁を与えようとするのです。このことは、経典でも往相回向（向かうこと）そして還相回向（帰ってくること）として書かれています。

そのため、山本さんも病室の前で合掌をして念仏を称えたときに、その患者さんが仏さまとなられて、この私のために念仏となつて帰ってきてくれたことを実感し、改めて仏さまのお慈悲とおはたらきを感じたそうです。

私はこの話しを聞いたとき、仏さまも私たちに「いってらっしゃい」と言ってくれているような気がしてきました。

娑婆世界に生まれても、必ずどうか私（阿弥陀如来の）浄土へいらつしやいと言ってくれる仏さま。その仏さまは、お名号の六文字「南無阿弥陀仏」となつて、念仏として私たちに届いている。

その念仏は、若いも若いも、優等も劣等も関係なくはたらきかけてくれる。その仏恩を報ずるとき私たちは合掌して「南無阿弥陀仏」と念仏をさせていただきます。南無阿弥陀仏

合掌

カナダ開教使 大内祐真

日本語法要のご案内

毎月第一と第三の日曜日（午後一時より）日本語での日曜法座をZoom配信にて行っております。ご参拝を希望される方は、トロント仏教会の事務所 tbc@tbc.on.ca まで参拝希望の旨をメールしていただければ、法要のご案内と一緒にzoomのリンクを送らせていただきます。

※zoomリンクは英語法座と同じものを使用しています。時間帯が異なるだけですので、日英両法座の参拝を希望される方も同じリンク先を使用してください。

法蔵菩薩因位時

「(阿弥陀如来が)法蔵来の因位の時に・・・、」

『まことの苦勞』

生意気さかりの年頃の子どもがいる家庭では、「ほんまにもう、勝手に大きくなったような顔をして！」という愚痴が聞かれることがあります。物心つかない頃から、あれやこれやと心配を育ててきたにもかかわらず、家族の思いに反する言動があり、しかも悪そびれた様子もない時、ついつい口にしてしまう言葉です。

その結果、「知るかいな。産んでくれと頼んだわけでもあるまいし」と悪態をつかれては、「情けない」とため息が漏れ、身体中の力が抜けてしまいます。人間は、自分が苦勞してきたことへの「とらわれ」からなかなか離れることができず、ともすれば、その苦勞に見合った子どもの成長を期待し求めたくなります。

親子や家族でさえそうなのですから、誰かの為に苦勞し続け、たとえ心が通じ合わなくても、けっしてあきらめることなく、どれほど長い期間がかかっても、その苦勞を愚痴るどころか自分の無上の喜びとするなどということが、はたしてどれだけ人間にできるでしょうか？

「仏説無量寿經(大經)」というお経の前半には、阿弥陀さまが仏さまに成る前(因位のときに)は「法蔵菩薩」というお名前であり、この法蔵菩薩がどのようにして仏さまに成られたかが詳しく説かれてあります。

そこには、われわれにはちよつと想像もつかないような「あきらめない強い意志」「とてつもなく長い時間」「人を救う為の清らかな行為」などが示されて、「法蔵菩薩」があらゆる人々を仏にするため「ご苦勞」されたと言われています。

經典の表現には、ただ読むだけでなく、どうしてそう説かれているのかを窺ってみなければ意味がありません。

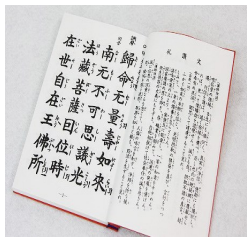
この「ご苦勞」の表現は、阿弥陀さまがどれほど真実で清らかなのかを表現したもののようですが、見方を変えれば、それほど清らかにすることが難しいのが「この私」という不真実である味わえるのではないのでしょうか。けれども、けっしてあきらめて捨ててしまうことなく、あれやこれやと思索をめぐらせて、なんとかしても人間を真実に導きたいという「ご苦勞」の内容が「法蔵菩薩が因位のときに・・・、」以下に説かれているのです。

『ひらがらな正信偈・森田真円』より

カナダ教団婦人会 ワークショップのお知らせ

トロント仏教会に駐在している大内祐真氏が、浄土真宗本願寺派における勤式(莊嚴、読経、儀礼作法など)を3回にわたってレクチャーします。

第三回：読経と偈頌



仏事勤行において欠かしてはならないのが、經典を読むこと(読経)や偈文を読むこと(偈頌)です。浄土真宗本願寺派でも法要時には、所依の經典である「浄土三部經」や「正信念仏偈」といった多くの偈文を拝読します。そしてそれらには博士という音階があり、それぞれの經典や偈文がなんとも味わい深い儀礼空間を作り出します。第三回目は、実際にお経や偈文を称えながらワークショップを行います。

※第三回目のワークショップは、6月13日の午後7時からZoomにて開講します。ご参加を希望される方は、Darlene Rieger : darlene.rieger28@gmail.com までお問合せ下さい。

キッズサンガからのお知らせ



この度、トロント仏教会ではキッズサンガ(子ども会)をオンラインで再開することとなりました。

毎月第二日曜日と第四日曜日の午前9:45からzoomにて行っています。

子どもを対象とした法要後には、親子で参加できるワークショップなどを開きます。 ※法要ならびにワークショップは英語で行います。

ご参加を希望される方は、kids.sanghatbc@gmail.com までご連絡ください。

キッズサンガグループよりZoomリンクを送らせていただきます。